

魚の目で、琵琶湖を早急に捉え直そう



滋賀県立琵琶湖博物館

館長 川那部 浩 哉

琵琶

琵琶湖は言うまでもなく、日本列島でいちばん大きい湖である。だがそのとき、「大きい小さい」とは、ふ

つう面積で考えているように思う。そして第二位は、私が若い頃は八郎潟だったが、これは残念ながら干拓されてしまったので、現在では霞ヶ浦になる。

だが、面積で考えるのはほんとうに正しいか。いや、そこまでは言わなくても、正しい唯一のものか。「大きい」と言うのに相応しいものが、少なくとももう一つあって、それは体積すなわち水量である。魚をはじめ湖沼に棲む生きものにとつては一般に、表面積よりこのほうが大切だろう。ひところ流行した「琵琶湖は近畿の水がめ」なる標語は、この水量を主に考えたものだ。そして、体積で考えた場合の第二位は、北海道の支笏湖になる。

それでは、「琵琶湖の水はきれいかわいいか」。何で比べるのか、いろいろ議論はあり得るが、どんな指標をとつても、琵琶湖の現状は霞ヶ浦よりは「きれい」だと言うこと、これはおそらく動かないだろう。ところで、少なくとも温帯域では、深い湖は「きれい」で浅い湖は「汚い」。

これは、自然現象として自明である。霞ヶ浦や中国の洞庭湖に、摩周湖やバイカル湖の水の「きれい」さを求めるのは、根本的に無理である。また、もし後者が前者と同じぐらいの「汚さ」になったなら、湖に棲む生きものが破滅するのはもちろん、それ以前に人間に健康障害が現れ、いや、すでに死に絶えているかもしれない。

深い湖の底にはいつの季節にも酸素が存在し、浅い湖の底には反対に無酸素の季節のあることが多い。これが自然界の原則だ。それが…琵琶湖の深底部に無酸素の部分が近年出現し、いや、最近ではもっと浅い底にすら、無酸素のところを好む細菌が拡がって来ていると聞く。明白な「異変」の出現である。早速に対策を講じ、この状態を進行させる可能性のあることはすべて取り敢えず排除しなければ、取り返しの付かないことになる恐れが高い。

陸上動物である人間に、水中のことがなかなか判り難いのは、ある意味で当然である。したがって、水中の生きものに異変の詳細を尋ねること、取り敢えずは魚の目でこの異変を捉えることが、いま早急になされなければならない。

